

原爆被害者の証言と平和教育－文集を読んだ感想にかえて－

『若い世代に被爆体験を語り継ぐために－平和学習の感想文集』

(被爆体験証言者交流の集い世話人会) pp28-30

私は、戦後生まれ(1946年)で、広島県呉市で育ちました。自分自身を振り返ってみると、小・中学校で「平和教育」に接しています。映画「千羽鶴」は、学校で鑑賞しました。「原爆の子」も観た覚えがあります。原爆資料館も見学しています。原爆病院に入院中の患者の方々にお見舞いの品を学級で送った記憶もあります。しかし、こうした「平和教育」は、その後姿を消したようです。1969(昭和44)年に結成された広島県被爆教師の会は、結成にあたり「十年前までは、子供たちは肉親や近所から原爆について聞いていましたが、今はそれも少なく学校でさえもほとんど話されていない状態です」(昭和44年度活動方針)と述べています。

新聞報道を見ると、1960年代後半(昭和40年代前半)から「被爆体験の継承」をめぐる様々な動きが取り上げられるようになっていきます。66年から翌年にかけて原爆ドーム保存のための募金運動が全国的に展開されました。広島市長の8月6日の平和宣言は、67年から、「被爆体験の継承」の必要性を訴え続けるようになりました。広島市教委と県教委は、68年から69年にかけて、原爆問題を系統的に学校教育に組み入れ始めました。

1970(昭和45)年代に入ると、市内の学校では、原爆犠牲者の追悼式や慰霊祭が学校の行事として開かれるようになっていきます。翠町中学校(71年から平和教育を開始)は、74年に校庭にある第三国民学校の慰霊碑で校内慰霊祭を開催しています。第5回の慰霊祭からは、遺族が加わるようになったそうです。旧広島市女の原爆犠牲者の慰霊祭は、戦後遺族会と同窓会によりひっそりと営まれていましたが、75年から舟入高等学校の生徒が参加するようになり、76年6月には、修学旅行で広島に来た東京都葛飾区の上平井中学校の生徒が、同校の慰霊碑の前で追悼式を行っています。同じころ、私は、広島市内に住む従姉から、それまで語ったことのない動員学徒としての被爆体験を初めて子供に話した動機を聞きました。彼女が話す気持ちになったのは、学校の宿題として自分の子供が友達と一緒に体験の聞き取りに来たからだということでした。これらは、平和教育が原爆被害者を励ましたり、被爆証言を引き出したことを示しています。

平和教育を進めた学校の多くが、その成果を冊子にまとめました。1970(昭和45)年代以降、広島県内では、平和学習の成果は、聞き取りによる被爆体験記集や自分の学校の被災記録の出版として残されています。80年代には、広島で平和学習を実施した県内の学校や修学旅行で広島に来た子どもたちの感想文集が沢山出されるようになりました。広島平和文化センターは、平和学習の成果として学校がまとめた冊子を約350冊(うち120冊は修学旅行記念文集)所蔵しています。被爆体験証言者交流の集いの各団体・グループに

寄せられた冊子を合わせれば膨大な数になると思われます。

ヒロシマの「思想化」・「普遍化」の必要性は、昔から言われています。この言葉には、「原体験」にのみ頼ってはだめだというニュアンスが込められている場合があります。こうした被爆体験の否定的なとらえ方は、今日に至るまで存在し続けています。この冊子には収録されていませんが、子どもたちの感想の中にはあるのではないかと思います。しかし、1980（昭和55）年代以降の証言活動の高揚は、原爆被害者自身のこうした社会の無理解との長い闘いの結果もたらされたものでした。

原爆手記の出版状況を調べてみると、出版が活発になるのは、1968（昭和43）年以降のことです。同年からは毎年400件以上の手記が出版されています。また82年に1000件を超え、現在に至っています。私は、68年以降の手記数の増加の主要な原因として、体験継承を積極的に進める平和教育の存在を考えています。しかし、82年以降の被爆体験の増加は、原爆被害者自身の被爆体験継承への積極的な意欲無しには理解することができません。87年の「被爆体験証言者交流の集い」の結成には、これと同質の意欲が存在するものと推測しています。